# 会員賞受賞祝賀会のごあいさつ

## 荒金大琳君が毎日書道展会員賞を受賞して思うこと

社団法人　創玄書道会理事長
文化功労者
金子鷗亭

荒金大琳君の毎日書道展会員賞受賞は、さまざまな意味で大きな意義を持っている。

まず、その一つは荒金大琳君の幼少の頃から拙い芽を上手に育て、痛めず、のびのびとあらゆる方向に発展出来るよう指導された首藤春草先生のご功績である。

先生は、荒金大琳君、末広小華さんの二人の立派な作家を毎日書道展の会員賞を受賞させ、世の中に送られた。なかなか一人の先生が、二人のグランプリである会員賞の受賞者を育てるということは、容易ではない。先生は人の長を見抜くことがうまい。そして、幅広い大きな視野から人の芸の領域を広げさせていくことに秀でている。先生は、たまたま大分県に居住され、この数年間、二人の素晴らしい作家を世の中に送り出されたのである。多くの人は自分のところに抱えこんで、なかなか外に出して、自由な空気を吸わせようとさせない。そういう環境で育った、荒金君はなかなか普通の人とは違った味わいを持っている。

ひとつの例をあげると、首藤春草先生のお許しを得まして荒金大琳君は、東京の私の自宅へ指導を受けるのに約12年間になりますが、月に一度ぐらい上京して私に指導を受けにきている。しかし、来たところで、私は普通の門人と同じように扱い、九州から来たといって特別に長い時間にわたって指導をすることも出来ない。特別な扱いはせず、ごく普通に扱っていた。大琳君どうなることかと、まあじっとその態度や情熱を見守っていた。

荒金君の家から大分空港まで約一時間。さらに飛行機で一時間以上。羽田に着いて東京の私の家まではやはり一時間以上かかる。かなりの長距離の研究である。なかなか容易なことではないと思う。一年に一ぺんや二へんぐらい来るのならともかくも、あらゆる困難を押し除けて、少なくとも一年に十回ぐらいは東京に出て来ていろいろな相談をする。しかし、私はさらりとした普通の人々と同じような指導しかしない。それにもかかわらず、本当に絶えることなく欠席することなく大琳君は通って来た。そうしたことが、私から吸収する物より、もっと大きな収穫になったと思う。それは本人自身の大きな魅力となり、並大抵の普通の人とは違った根性が育ったのである。自分の志望に対して、深い情熱を傾けているということが、その態度から、その行動から感じました。いずれは、大きな仕事をしてくれるだろうと楽しみにしていました。

その期待に応えての今回の受賞です。

今の日本の書道会における近代詩文書にもさまざまあり、読めるような近代詩文書。前衛的な抽象性を加えて読めないけれど面白い近代詩文書。荒金君の今回の作品は誰にも読めて、品格があって見る人々に今の我々の状態によく理解出来るような表現等いろいろな条件を備えている。荒金君は一生の中でこういうのを何枚書けるか、難しい問題だと思うくらい、いい作品であり、非常に高度な作品だと思う。

まあよくご覧ください。「ぬくもり」作品参照。最初の「吹きぬけて」云々とありますが、最初の「吹」、「風」、「見」、そして「少女」の二字を見ましても、古典の香りがある。約三千年間の人々が、日本、中国の書の先人達が研究して開いてきた、書の歴史が築きあげた古典に包まれ、しっかりした骨格、リズム、線のひびきを持っていて品格がある。それからまた、平仮名を見ましても、平安朝の平仮名に主をおいており、高野切の第三種というか、一種に近いかもしれないが、しっかりと仮名を学び非常に自分自身のびのびと書いている。平安朝の仮名の持ついいところを合わせて、漢字と仮名を組み合わせている。

私はいつも荒金君に、君の書は意図というか、気負いというか、傾向が残っていて、プレッシャーがいつもかかっている。何か、先生からほめられたい。あるいは又、人々にあっと驚かすものを書きたいと、これは、荒金君だけの事でなくみんなこう考えながら書くんです。とにかく極端な変化をとらずに、何と言うことなしに悠然と書けること。これが一番、品格の高い作品を生むことになる。楽に書けること。緊張しちゃあだめ、余裕を持っていろんな目的その他を忘れて、普段の鍛錬は厳しくやるけれども、作品を作る時には無心になること。意識をして計算して筆を取った場合には面白くない。常識的で割り切れるような作品となる。そしてあくが残って、なんとなく見ていていやらしさが出て来るんですね。

今回の作品はそれがない。この作品は荒金君自身から解説すべきでありましょうが、私が荒金君に「どうしてあんなものが出来たのか。」と聞きましたら、実は上京し私に色々言われて、まあどういう風にしようかと迷っていたところ、ある夜、十一時か十二時頃風呂に入って寝ようかと思ったら大琳君の奥さんがそばから「詩が一つ出来ましたよ。見て下さい。」と言って渡されたのがこの詩なんですね。本人は「それじゃあ、ひとつ今晩書いてみようか。」と言って筆を取ったのが午前一時半との事。そして三枚だけ書いて、寝たそうです。その中の一点がこれですね。もちろんそんな時には毎日書道展に出品しようとか、そんな意識は全くない。まさかそんな作品を私が取るとも思わず上京。他の努力した作品と並べたが、問題にならない。やはり色々な意識がはっきり出ていてだめ、その夜の作品が成功だったのである。作品を作るということは大変である。腕も悠然として書く、慌てない、色々な意図をつけて、自分の平素の腕に頼って筆を運ぶ。まあ当然のことながらこれが出来ないんですよね。これは作品を作る上において非常に参考になる、いい例だと思う。

こんな風にして書いたこの作品。毎日書道展の理事会、及び大賞の会員賞の選考委員会（三十九名出席）の全体の賛成にて当選しました。

「ああいった作品はなかなか出来んよ。」と私が言っているのを本人は「なあに、あんなものいつでも書ける。」と思っているかもしれない。こういう立派な作品は仲々書けるものではない。大琳君こういうことを大事にしてよりいっそうなる作品を作ってほしい。さらに深みのあるものに伸ばしていくことがこれからの荒金大琳君の勝負でしょう。みんなで声援を送って荒金君を立派な作家として活躍出来るような雰囲気に私としては応援していただきたいなと思う次第です。

S61年 1986年 38才

第38回毎日書道展（1986）毎日書道展会員賞（79×182）

ぬくもり
吹きぬける
風の見たものは
あどけない
少女の髪に
そよぐ
陽ざしのぬくもり
年老いた人の
頬を照らす
あたたかい
抱擁

節子詩

伝統であるところの漢字・仮名をしっかりと勉強し、庶民大衆の人々に愛されるような書を求めていく。これが我々のやるべき書の姿である。古典をそっくり真似したり、読みも全然出来ないような漢文ばかりを書いた作品。又、これが現代書でございますと言ってもまったく読めないものばかりの作品では世間には通らない。

やはり多くの人々から愛され、理解され、生活圏、生活環境の中で生きている書。どこかに掛けておきたい。眺めたい。見て気持ちがいい。というようなそういう書を作るべきで、そうでなかったら本当の書道の発展はないと思う。なんでもないようで、誰にも理解され、そして一番品格の高いものを求めなければならない。誰にも読めなく、漢字あるいは仮名にしても、自分自身、なかなかわからないというものを書いていて、現在の日本を代表する書になるということは、到底考えられない。三十年・五十年はひょっとしたら名声は保つかもしれないが、亡くなって三十年か五十年たつともう名前は消えてしまう。その仕事は残らない。やはり常に新しいその時代に合うような仕事をした人達だけが歴史に残る。昭和は前期、中期、後期と年代を分けられる。これから五十年・百年たつと世の中は、変遷していくことだろう。日本の国も、どういう風な運命をたどるか知らないが、少なくとも昭和の時代に書の革命が起こって、今までの漢字・仮名・篆刻の他に新しい近代詩文書というものが大きな金字塔を建てたこと、あるいは又、一字書であるとか前衛書道が生まれたということが、永く書道の歴史に残ってそれぞれのその分野に賭ける人々の名前は記録に残るんだと確信している。

荒金大琳君もこういう思想のもとに仕事をしてほしい。書を学ぶ者、人の言葉も気になるが他の人々がどう言おうと、日展がどうであるとか、県展がどうであるとか、そういうことも大事ですが、我々の修行の糧として、もっと大事なことは現代に生きた書を学ぶことであり、それを表現することである。創作するのが自分の命なんだと考えてこれからのちも、みなさん方が、おおいに発展して自信を持って前進を続けていってほしいと思う次第です。

今回の荒金大琳君の喜びは、単に一人の喜びでなく、荒金君がこういう作品を生んだことは、日本の書道会にとって私は非常に嬉しい、いいことだったと思っている。自信を持ってそう思う。

これからも今の時代、現代の書はいかにあるべきか、そういうことを考えながら我々のための書作に精進してほしい。

荒金大琳君のこれからのますますの活躍をたのしみにしてゆきたい。おめでとう。

昭和六十一年十一月六日於別府市杉の井ホテル